通勤を取り巻く痛切なる事情

使用者委員　吉冨秀介

　他の先進諸国に比べ低い労働生産性を上げなければならないとか、働き方改革で時間外労働を削減しようなどと、労働を取り巻く環境が注目されています。当然、それぞれの国や地域、或いは企業の事情があるのだから一概に比較はできない訳で慎重に進めなければならないでしょう。

　こうした議論に触れるたびに思うことは、大都市と地方都市で異なる通勤事情についてです。東京で勤務していた経験がある者として、その辛さは筆舌に尽くしがたいと考えるからです。

　今を遡ること 30 年前。国鉄が民営化し、今ではトップブランドになった銘柄のビールが発売された年に、私は社会人になりました。そして初出勤の日に、決して忘れることのできない経験をするのです。

　それは、通勤途中の乗り換え駅で起きた出来事です。乗車待ちの、最前列に並んでいた私の前に列車が滑り込み乗降口が開くと、満員（を通り越したすし詰め）の乗客が扉の枠に掴り、乗降口から「溢れ出したまま」動きが止まりました。なす術もなく立ち尽くしていると、後ろに並んでいた 2 列目以降の人たちが、溢れ出ている人垣に向かって正に突進を始めました。そして戸枠の上に手を掛け、溢れたままの先客の脚と脚の間に自分の脚を組み入れ！床に足掛かりを確保すると全体重をかけて「人の膨らみ」を自分ごと中に押し込みながら「乗車」していったのです。

　余りの光景に茫然としましたが、数分後、私も同じような方法で、後続列車に乗り込んだのは言うまでもありせん。

　私は学問を修める者でもなく、各種論文や数値を取り上げて示すことはできません。

　しかし、あのエネルギーや不快感をコストに代えると如何ばかりかと考えてしまいます。

　企業や関係機関が、従業員が事業場に通う為にその様な負担をしていることを考慮した「労働の生産性」を弾き出し、その結果人口の国内一極集中から、地方への分散が進むようになれば良いのにと考えています。

　ところで現在では、官民挙げて通勤混雑緩和へ取り組んでいるところだそうで、大いに改善されることを祈っています。